

## 第百五話 大政翼賛会の功罪は？

昭和初期の政友、民政二大政党制を経て、超然内閣といわれる内閣が誕生し、次第に新党運動に収斂していった。新党運動は近衛を担ぎ出すことを目算していた。一方、「革新官僚」や「少壮軍人」がこの新党運動に関心を持ち始めた。一方、欧州正面ではナチスが台頭し、ナチス流の国民再組織があり、国家総力戦の立場から陸軍はそれを歓迎した。その集大成というか、行きついた先が「大政翼賛会」である。

### 1 大政翼賛会に至る重要人物の登場

#### (1) 陸軍軍務局長武藤章

陸軍の政治担当部局は陸軍省軍務局であり、その局長に武藤章少将が任命(1939/9/30)された。武藤は“この重大な局面を開く内閣が欲しい”その首班には近衛氏が望ましいと考えていた。

#### (2) 肅軍演説(1936(S11)年5月7日)二・二六事件の戒厳令下

民政党の斎藤隆夫が、支那事変処理を批判して、戦争目的とする東亜新秩序建設の理念に疑念を表明した。この演説は物議を醸し、斎藤代議士は除名され、この問題を切掛けに超党派の「聖戦貫徹議員連盟」(1940/3/25)が結成された。

#### (3) 各種政治団体の結成

革新右翼：①聖戦貫徹議員連盟 ②東亜建設国民連盟

観念右翼：純正日本主義の各種政治団体

#### (4) 近衛氏の登場

これらの運動の象徴的存在であった近衛は、「新党」との言葉を避け、「政治新体制の確立」を掲げて、衆望を担って遂に立ったのである。

基本となる政策は、①国防国家の建設、外交の伸長との陸軍の政策の基調を取り込む  
②国務及び統帥の結合を図るため、最高国防会議の設置を企図する。  
当初は軍部を抑え込む狙いがあったが、軍部の革新勢力協力するものへと変質していった。

### 2 大政翼賛会の概要

1940(S15)年10月12日に第2次近衛文麿内閣によって、新体制運動を推進するために創立された。これは近衛が中心になって進めてきた新体制樹立運動の結実であり、総力戦争を遂行するために一国一党制を実現させようとしていた軍に対し、国民各層の有力な分子を結集して軍に対抗できる強力な国民組織をつくらうとしたものであった。

当初は、一国一党の形態はとられたにもかかわらず、近衛の思惑を外れて、政府に指導される公事結社として、道府県支部長は地方長官の兼任となり、行政補助機関のようなものとなった。

東条英機内閣では国民統制組織としての色彩を強め、42年4月には翼賛選挙に協力し、6月にはそれまで各省の監督下にあった産業報国会、大日本婦人会などの諸国民組織運動を傘下に統合した。45年6月に、鈴木貫太郎内閣のもとの国民義勇隊創設に伴い、解体、吸収された。



\* 全体主義、軍国主義と批判することは容易い。然し、国家総力戦時代にあつて、如何にして国家の力を結集するかは重大関心事項だ。国民の自発的協力が得られないような国家は消滅するしかないのだろうか？非常時には非常時なりの方策があつて然るべきではないだろうか？そろそろ国家緊急事態への対処について冷静な議論をすべき時に至ったのではなかろうかと愚考する次第である。